

PA-1

複合語地名の分布から見る連濁促進・抑制条件の地域差¹

平井偉在耶 (東京大学大学院 修士課程) isaiahnn@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

要旨 日本語の複合語における連濁生起の不規則性と予測不可能性について、異なる連濁傾向を有する方言間での拡散・混合が寄与している可能性が指摘されている(Irwin & Vance 2015)。連濁の促進条件・抑制条件の方言差・地域差の解明を目指し、本研究では15種類の後部要素について「歴史地名データ」中の複合語地名の連濁・非連濁の地理分布を音韻条件ごとに調査した。その結果、前部要素最終拍の頭子音が /k/, /s/, /c/, /w/, 鼻子音, 後部要素初頭と同じ子音, である場合にそれぞれ特定の地域で非連濁傾向が見られ、また前部要素最終拍の頭子音が /s/, /c/, /w/ である場合にはそれぞれ別の地域で連濁傾向も見られることが明らかになった。

1. はじめに

日本語の複合語形成において、/me/ (目) + /tama/ (玉) → /medama/ (目玉) のように後部要素初頭の清音がそれと対応する濁音に交替することがある。この現象を連濁という。一方、/mizu/ (水) + /tama/ (玉) → /mizutama/ (水玉) のように連濁を起こさない複合語もある。連濁の生起については、多くの先行研究(e.g. Itô & Mester 1986, 窪園 1999, 佐藤 1989, 杉藤 1965, Vance 1987, etc.)から音韻, 枝分かれ構造, 修飾関係, 品詞, 語種, 意味などに関する様々な促進条件・抑制条件が明らかになっているが、未だ完全に予測可能になるまでには至っていない。連濁の不規則性と予測不可能性について、Irwin & Vance (2015) は異なる連濁傾向を有する方言間での拡散・混合が寄与している可能性を指摘している。

本研究では、連濁傾向の方言差・地域差の解明を目指し、複合語地名について、特に特定の音韻条件の下で連濁の生起傾向に地域差が現れるかを調査した。

2. 先行研究とその問題点

複合語地名の連濁・非連濁の地理分布の偏りを調べた先行研究には、Takemura, Hwang, Pellard & Vance (2019) と Van Bokhorst (2018) があり、両者とも日本郵便株式会社が公開している「郵便番号データ」内の町域名(国内の各郵便番号に対応する各地区の名称)を地名資料として用いている。しかし、町域名は複数の地名を繋げて作られているものも多く、「郵便番号データ」内の町域名から個々の地名を正確に取り出すのは難しい。また、複合境界について複数の解釈が可能のために複合語地名として取り出すのが難しい場合も多い(e.g. “中田町(ナカタマチ)” は “中田という町” か “田町という地域の中央部” か)。そのため、「郵便番号データ」のみを地名資料として用いる調査には限界がある。

また、両者とも主に地域間の連濁の生起頻度の差のみに注目しており、連濁の促進条件/抑制条件が地域・方言ごとに異なるという可能性については、少なくとも調査手法の上では考慮されていない。同様の問題は複合語地名を対象としていない他の先行研究(e.g. Irwin & Vance 2015)にも見られる。

¹ 本発表は東京大学文学部に提出した卒業論文の内容を加筆・修正したものである。本研究の構想の段階で、小西いずみ、窪園晴夫、白井聡子、ティモシー・J・バンスの各氏(敬称略)から有益な助言をいただいた。本稿内の全ての誤りについては、発表者に責任がある。本研究で用いた「歴史地名データ」は、人間文化研究機構および H-GIS 研究会の研究成果である。

3. 調査

2 節での指摘を踏まえ、本研究では人間文化研究機構が公開している「歴史地名データ」を地名資料として使用し、複合語地名について、特に特定の音韻条件の下で連濁の生起傾向に地域差が現れるかを調査した。連濁の生起傾向の地域差を音韻条件ごとに調査するという手法は、先行研究において未だ採られていないアプローチである。

3.1. 地名資料について

「歴史地名データ」は、『大日本地名辞書』『式内社神名帳』『旧5万分の1地形図』から抽出された地名に緯度経度などの情報を付与して構築されたデータベースである(関野樹・原正一郎 2018)。このうち、本研究で使用したのは、地名の読みの情報がカナとローマ字で付与されている、『大日本地名辞書』(正確には、その増補版である吉田東伍 1992)を出典とする部分である。『大日本地名辞書』は明治期に編纂された地名辞書であり、収録されている地名は行政による読みの改変を現代の地名ほどは受けていないものと思われる。『大日本地名辞書』の地名の収録範囲は樺太から台湾にまで至る。本研究は伝統的に日本語の本土方言が話されてきた地域を調査対象とし、奄美大島以南・八丈島以南の伊豆諸島・北海道以北の地名は調査対象から外した²。以下、「歴史地名データ」内での地名とそのカナ表記、ローマ字表記の対応を「地名(カナ, ローマ字)」のように表記する(e.g. 「白川(シラカワ, shirakawa)」)。

3.2. 調査方法

調査対象とする複合語地名を、後部要素が /kata/ (方), /kawa/ (川), /ki/ (木), /saka/ (坂), /saki/ (崎), /sawa/ (沢), /sima/ (島), /ta/ (田), /tani/ (谷), /to/ (戸), /cu/ (津), /cuka/ (塚), /hasi/ (橋), /hata(ke)/ (畑), /hara/ (原) の15種類のいずれかであるものに限定し、(1)の音韻条件ごとに調査した。前部要素の最終拍は連濁によって交替する拍の直前の拍であることから、以下、複合語中の前部要素の最終拍を「直前拍」と呼ぶ。

(1) 調査対象とした音韻条件

- | | | |
|----------------|----------------|-----------------------|
| a. 直前拍頭子音が /k/ | f. 直前拍が濁音 | k. 直前拍が /N/ |
| b. 直前拍頭子音が /s/ | g. 直前拍頭子音が /r/ | l. 直前拍頭子音が後部要素初頭と同じ子音 |
| c. 直前拍頭子音が /t/ | h. 直前拍頭子音が /j/ | m. 複合語全体が4拍以下 |
| d. 直前拍頭子音が /c/ | i. 直前拍頭子音が /w/ | |
| e. 直前拍頭子音が /h/ | j. 直前拍頭子音が鼻子音 | |

始めに、(1)の音韻条件ごとに、上述の後部要素を含む複合語地名を抽出した。その際、「山田川(ヤマダ, yamadagawa)」のようにカナ表記が地名の一部分のみの読みを表す場合は、その部分も地名であるものとした(この例では“山田”も“山田川”も複合語地名に認定した)。また、同一郡内での地名の重複(e.g. 越後国西蒲原郡の「角田(カクダ, kakuda)」「角田山(カクダ, kakudayama)」「角田浜(カクダ, kakudahama)」)

² 北海道以北は元々アイヌ語話者が居住していた地域であり、日本語話者が北海道に大規模に移住したのは近年のことである。また、奄美大島以南の南西諸島は、伝統的には琉球諸語が話されてきた地域である。伊豆諸島の八丈島や青ヶ島で伝統的に話されている言語については、日本語の方言(八丈方言)とする立場もあるが、本研究では日琉語族(Japonic)内の別の言語(八丈語)であるという立場を取る。

表 1. 地名と記号の対応

後部要素	連濁	非連濁
/kata/	○	○
/kawa/	↑	↑
/ki/	△	△
/saka/	∩	∩
/saki/	↑	↑
/sawa/	⚡	⚡
/sima/	☀	☀
/ta/	∨	∨
/tani/	∩	∩
/to/	□	□
/cu/	◎	◎
/cuka/	○	○
/hasi/	☆	☆
/hata(ke)/	💧	💧
/hara/	⬡	⬡

は、漢字表記どうし、読みの表記どうしの包含関係から判定し、重複をなくした。ここまでの作業は主に Python の正規表現ライブラリを用いて自動化した。

次に、各地名を目視で確認し、誤って抽出されたものを取り除いた。例えば、重複(reduplication)によって形成されたと思われる地名や、指定の後部要素の直前に属格標識 /ga/, /no/ が現れる地名を取り除いた。

次に、(1)の音韻条件ごとに、複合語地名の分布を地図に示した。ただし、音韻条件ごとに、連濁率が極端に高い(80%以上)/低い(20%以下)後部要素や、分布域が狭い後部要素の複合語地名については地図に表示しなかった。そのため、地図に表示した複合語地名の後部要素は音韻条件ごとに異なる。連濁地名は赤色、非連濁地名は水色の記号で示し、後部要素ごとに記号の形状を変えた(表1)。記号は奈良大学岸江信介研究室が公開している「Symbols for Linguistic Atlas」の中から使用した。地図の作成には ESRI ジャパンの「ArcGIS Online」のマップ作成機能を使用した。

最後に、各地図を観察し、複数の後部要素に渡って記号の色の分布に偏りが見られる地域を探した。

4. 結果・議論

紙幅の都合から、地域差が見られた地図のみを示す。複合語地名の連濁の生起傾向に地域差が見られた音韻条件は全て直前拍頭子音に関するものであり、直前拍頭子音が /k/ (1-a), /s/ (1-b), /c/ (1-d), /w/ (1-i), 鼻音(1-j), 後部要素初頭と同じ子音(1-l)である場合である。

図1は直前拍頭子音が /k/, 後部要素が /kata/ (方), /ki/ (木), /saki/ (崎), /sima/ (島), /ta/ (田), /tani/ (谷), /to/ (戸), /cuka/ (塚), /hasi/ (橋), /hata(ke)/ (畑) の複合語地名の分布である。この条件では、大分北部・熊本北

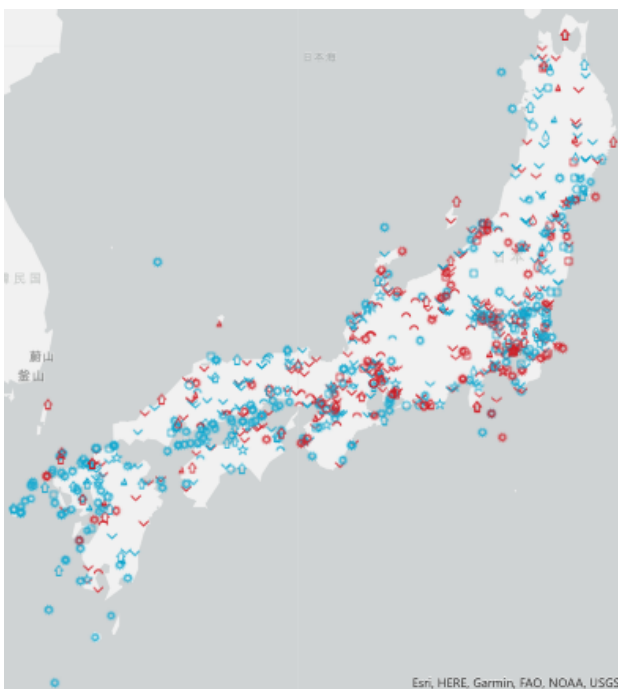


図 1. 直前拍頭子音が /k/ の複合語地名の分布

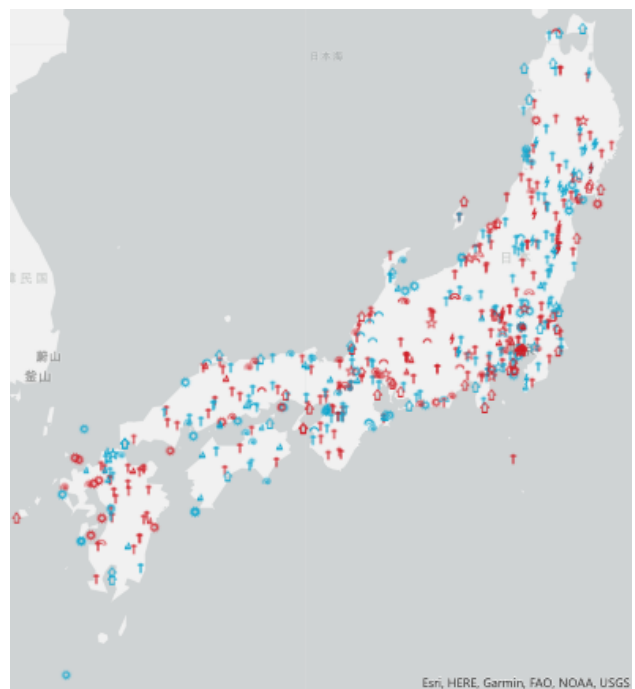


図 2. 直前拍頭子音が /s/ の複合語地名の分布

部から長崎の五島列島に至るまでの九州北部には非連濁地名が集中しており、この傾向は /sima/ (島), /ki/ (木), /hasi/ (橋) など複数の後部要素に渡って認められる。

図2は直前拍頭子音が /s/, 後部要素が /kawa/ (川), /ki/ (木), /saka/ (坂), /saki/ (崎), /sawa/ (沢), /sima/ (島), /tani/ (谷), /cu/ (津), /hasi/ (橋) の複合語地名の分布である。この条件では、愛知西部から岐阜・富山南部・長野西部・静岡にかけての範囲(以下、「中部地方西南部」と呼ぶ)に連濁地名が集中しており、この傾向は /cu/ (津), /kawa/ (川), /tani/ (谷) など複数の後部要素に渡って認められる。一方、四国では、直前拍頭子音が /s/ の複合語地名は後部要素が /kawa/ (川) のものを除き全て非連濁地名である。

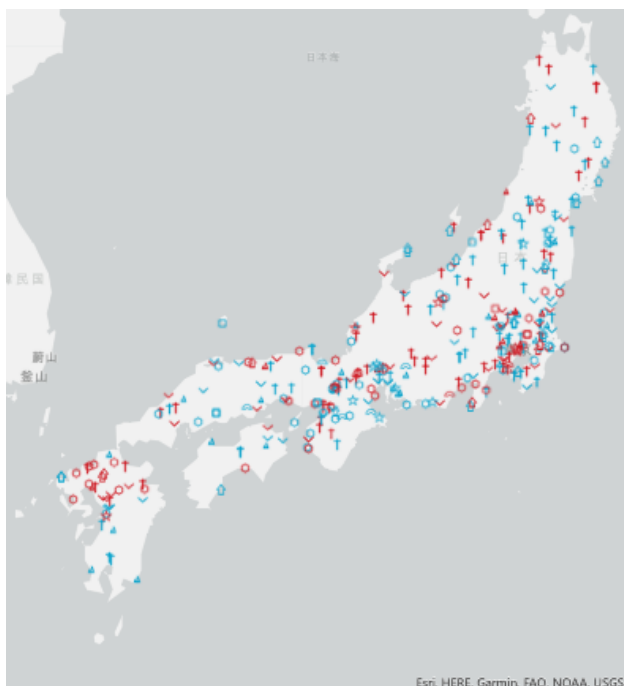


図3. 直前拍頭子音が /c/ の複合語地名の分布

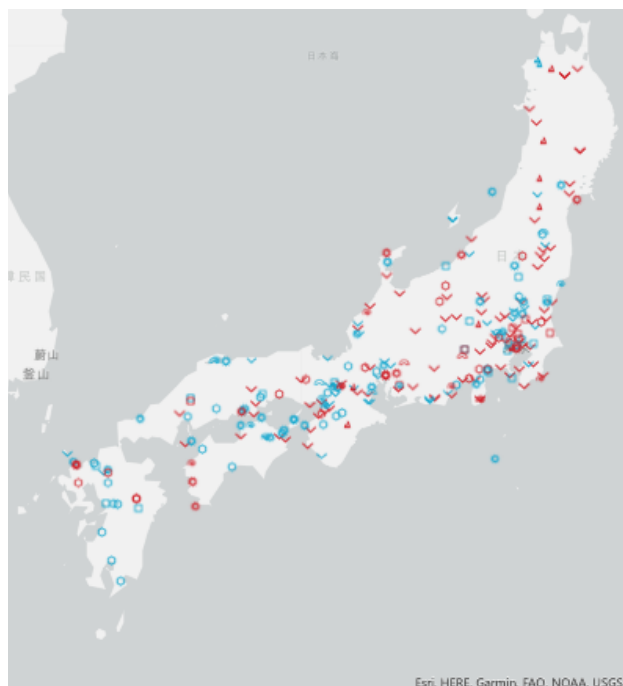


図4. 直前拍頭子音が /w/ の複合語地名の分布

図3は直前拍頭子音が /c/, 後部要素が /kawa/ (川), /ki/ (木), /saka/ (坂), /saki/ (崎), /ta/ (田), /to/ (戸), /hasi/ (橋), /hara/ (原) の複合語地名の分布である。この条件では、図1での場合よりは狭い範囲ではあるが、九州北部に連濁地名が集中して分布しており、この傾向は /hara/ (原), /kawa/ (川), /ta/ (田) など強く現れている。一方、三重・愛知・静岡西部・奈良・滋賀南部にかけての地域(以下、「東海地方南部」と呼ぶ)には非連濁地名が集中している。これは /hasi/ (橋), /ta/ (田), /ki/ (木) など複数の後部要素に渡って認められる傾向である。また、福島を中心に山形南部から栃木北部にかけての地域(以下、「福島地域」と呼ぶ)には /kawa/ (川) を中心に非連濁地名が多く分布している。/hara/ (原), /ta/ (田) などにもこの地域での非連濁傾向が認められる。

表2. 直前拍頭子音が /w/ の複合語地名の分布

後部要素	東経 136.00°未満		東経 136.00°以上	
	連濁数	連濁率	連濁数	連濁率
/kawa/	2/4	50.0%	22/24	91.7%
/saka/	0/2	0.0%	3/6	50.0%
/saki/	1/11	9.1%	7/40	17.5%
/sima/	5/21	23.8%	7/23	30.4%
/ta/	17/29	58.6%	61/84	72.6%
/tani/	2/3	66.7%	8/8	100.0%
/to/	1/7	14.3%	8/18	44.4%
/cu/	3/9	33.3%	5/7	71.4%
/hasi/	0/3	0.0%	4/5	80.0%
/hara/	6/22	27.3%	9/20	45.0%

は非連濁地名が集中している。これは /hasi/ (橋), /ta/ (田), /ki/ (木) など複数の後部要素に渡って認められる傾向である。また、福島を中心に山形南部から栃木北部にかけての地域(以下、「福島地域」と呼ぶ)には /kawa/ (川) を中心に非連濁地名が多く分布している。/hara/ (原), /ta/ (田) などにもこの地域での非連濁傾向が認められる。

図4は直前拍頭子音が /w/, 後部要素が /ki/ (木), /saka/ (坂), /sima/ (島), /ta/ (田), /to/ (戸), /cu/ (津), /hara/ (原) の複合語地名の分布である。連濁地名のみ/非連濁地名のみが集中的に分布する地

域は見受けられないが、東から西に向かうに連れて徐々に連濁地名が減り、非連濁地名が増えるという緩やかな傾向が見られる。実際、図4の分布範囲をおよそ二等分する東経136.00°線で分け、その東側にも西側にも分布している10種類の後部要素(地図に示さなかったものも含む)について東側/西側でそれぞれ連濁数を集計すると、全ての後部要素において東側の方が西側よりも高い連濁率を示した(表2)。

図5は直前拍頭子音が鼻子音(/n/ または /m/)、後部要素が /kawa/ (川), /saka/ (坂), /saki/ (崎), /sawa/ (沢), /sima/ (島), /ta/ (田), /tani/ (谷), /to/ (戸), /cu/ (津), /cuka/ (塚), /hasi/ (橋) の複合語地名の分布である。この条件では、広島北東部・島根東部・鳥取西部・岡山北部にかけての地域(以下、「中国地方東部」と呼ぶ)に /kawa/ (川), /ta/ (田), /tani/ (谷) を中心に非連濁地名が集中している。

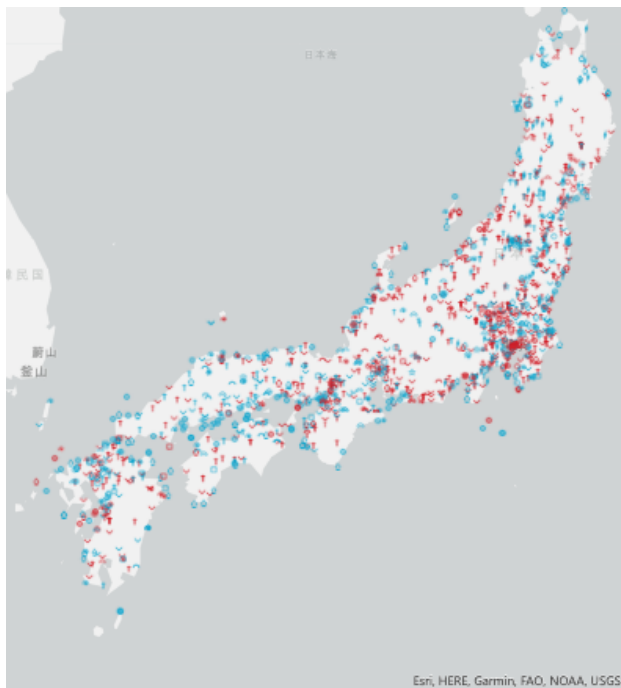


図5. 直前拍頭子音が鼻子音の複合語地名の分布

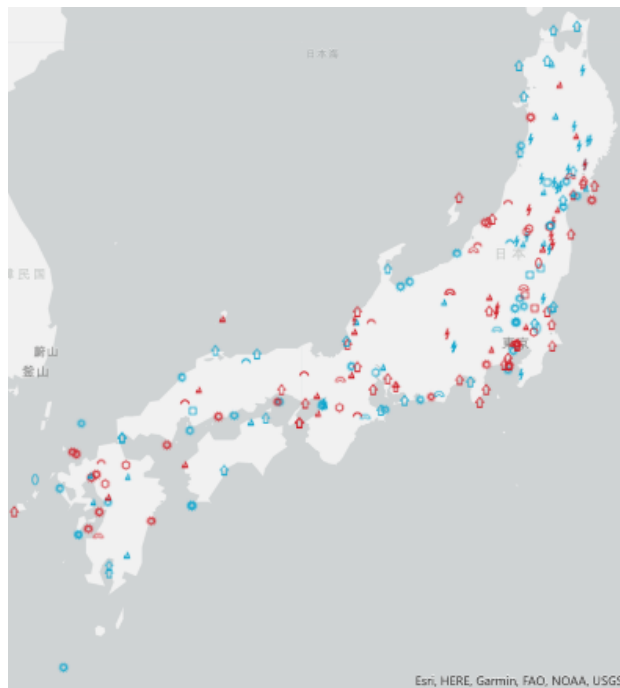


図6. 直前拍頭子音が後部要素初頭と同じ子音の複合語地名の分布

図6は直前拍頭子音が後部要素初頭と同じ子音、後部要素が /kata/ (方), /ki/ (木), /saka/ (坂), /saki/ (崎), /sawa/ (沢), /sima/ (島), /tani/ (谷), /to/ (戸), /hara/ (原) の複合語地名の分布である。この条件では、山形北部・宮城西部・岩手西部から北の地域(以下、「東北地方北部」と呼ぶ)に非連濁地名が集中的に分布しており、この傾向は /saki/ (崎), /sawa/ (沢), /ki/ (木) など複数の後部要素に渡って見られる。

以上の結果をまとめると、(2) のようになる。図7はこれを図示したものである。

(2) 複合語地名の直前拍頭子音と連濁生起傾向

- a. 直前拍頭子音が /k/ : 九州北部で非連濁傾向
- b. 直前拍頭子音が /s/ : 中部地方西南部で連濁傾向, 四国で非連濁傾向
- c. 直前拍頭子音が /c/ : 九州北部で連濁傾向, 東海地方南部・福島地域で非連濁傾向
- d. 直前拍頭子音が /w/ : 東日本で連濁傾向, 西日本で非連濁傾向
- e. 直前拍頭子音が鼻子音 : 中国地方東部で非連濁傾向
- f. 直前拍頭子音が後部要素初頭と同じ子音 : 東北地方北部で非連濁傾向

は、個々の地名の歴史的変遷の解明、当該地域の各方言の音韻体系の調査、該当地域の方言話者に対する無意味語・新造語を用いた実験など、様々な側面から検証されるべきである。

参考文献

- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 (2022) 「歴史地名データ」
https://bridge.nihu.jp/accumulateddata_detail/478706 [2022年12月アクセス]
- ESRI ジャパン「ArcGIS Online」<https://www.arcgis.com/home/index.html> [2023年10月アクセス]
- 蜂矢真郷 (2017) 『古代地名の国語学的研究』 大阪: 和泉書院.
- Itô, Junko, & Ralf-Armin Mester (1986) The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for Morphological Accessibility. *Linguistic Inquiry* 17(1): 49-73.
- Irwin, Mark, & Timothy J. Vance (2015) Rendaku across Japanese Dialects. *Phonological Studies* 18: 19-26.
- 岸江信介「Symbols for Linguistic Atlas」
<https://1431320719.jimdo.com/symbols-for-linguistic-atlas/> [2023年10月アクセス]
- 窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の音声』, 現代言語学入門 2. 東京: 岩波書店.
- 日本郵便株式会社「郵便番号データダウンロード」<https://www.post.japanpost.jp/zipcode/download.html>
[2022年8月アクセス]
- 大高博美 (2020) 「地名はなぜ・どのように難読化するか: 一難読化のプロセスに見られる音法則を探る」『言語と文化』, 関西学院大学, 23: 1-17.
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子 (編)『日本語の音声・音韻(上)』 233-265. 東京: 明治書院.
- 関野樹・原正一郎 (2018) 「デジタル歴史地名辞書の公開とその活用」『研究報告人文科学とコンピュータ(CH)』 2018-CH-118(9): 1-4.
- 城岡啓二 (2018) 「1拍前項をもつ全国の地名の連濁・非連濁について: 明治期村名の調査結果を踏まえて」『人文論集』, 静岡大学, 69(1): 89-118.
- 杉藤美代子 (1965) 「柴田さんと今田さん—単語の聴覚的弁別についての一考察」『言語生活』 165: 64-72.
- Takemura, Akiko, Hyun Kyung Hwang, Thomas Pellard, & Timothy J. Vance. (2019) Rendaku in place names across Japanese dialects. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 50: 79-89.
- Van Bokhorst, Michelle (2018) Rendaku in Japanese place names. Master thesis. Leiden University.
- Vance, Timothy J. (1987) *An introduction to Japanese phonology*. Albany, N.Y.: State University of New York Press.
- 吉田東伍 (1992) 『大日本地名辞書(第一巻~第八巻)』, 増補版, 東京: 富山房. (初版 1900-1907)